

## 論文

## 青年大木喬任と佐賀勤王党

重松 優\*

## 本稿の概要

はじめに

第一節 家庭

第二節 藩校弘道館と枝吉神陽

第三節 中野方蔵殉難

第四節 大木喬任の学問

第五節 佐藤信淵

おわりに

## はじめに

明治期の政治家にとって、尊王思想は、徳川幕府の瓦解を導いた大きな力であり、維新が達成されて時勢が変化したのちも、常に精神の根底に生き続ける存在であった。大隈重信を例にとれば、大隈は維新の功臣中、最もひらけた性質であって、率先して民権運動、文明調和論の旗手になった。しかし、その大隈をしても、「高遠の理想を説いたが、然も彼（大隈）は維新時代の志士に他ならなかつた。彼の中心思想は、皇室中心主義者で、云はゞ文治的帝国主義者であつた」と、徳富蘇峰は断言する〔徳富 1922〕。もうひとりの民権運動の雄、板垣退助も、天皇は「世界の孰れの国家に於ても之を見る可らざる所の最も美はしき…理想的」な関係を国民とのあいだに有し、「完全にして無欠」な求心力を国家にもたらすとして、忠君の思い

をゆるがせにしなかつた〔板垣 1919: 21-24〕。

筆者が研究対象とする政治家、大木喬任も、天皇を中心とする国家体制、いわゆる「国体」の成立に、格別の関係があつた。大木は初代文部卿として、明治最初期の文教政策の策定にあたり、明治5年（1872）10月、教部卿を兼任、その翌月には小学教育にはじめて「国体学」を導入した〔法令全書：明治5年（第7冊）1168〕。大木のこの時期の意見書草稿、〔大木喬任伯意見雑記〕には、国体の定義づけ、国民に向けての宣揚を意図する文章が多数残っており、これらが明治14年の憲法意見書、〔乞定国体之疏〕<sup>こくたいをきだめるをこうのそ</sup>につながつたと考えられる〔重松 2007b〕。大木はその意見書中に、憲法が定めるべき政治制度や国会開設時期をただ述べるにとどまらず、上古以来の国体が、いかに今日の新しい国家体制に反映されねばならないかとの理念を説いた。たとえば議会は、欧米で営まれる議会を模倣してはならず、記紀神話中の群神会議、「天安河の議」に基づかなければならないと大木はいう。この異様な主張が、「開明者流の為には多々の誹笑を受くべきは素より覚悟」していたというが、大木は全く真剣であつた〔島内 2002: 304〕。

\*早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程4年（指導教員 島 善高）

大木喬任が理想とした国体は何であったのか、それを探る手がかりとして、本稿では明治維新以前のかれの行実を取り上げたい。徳富蘇峰の大隈評にあった通り、明治の政治家の多くは、一個の志士だった青年期に、人間としての素型を得た。佐賀勤王党に属した大木も、傑出した教師と出会い、兄弟同然の同志を獄中に失うという鮮鋭な経験があって、はじめて独自の国体論を生んだのである。

### 第一節 家庭

天保3（1832）年3月22日、明治維新に先立つこと三十五年、頼山陽の没した年、大木喬任は佐賀藩士の父大木五左衛門知喬、母シカ子のあいだに生まれた<sup>(1)</sup>。大木家は物成四十五石の中級藩士の家で<sup>(2)</sup>、大木ははじめ幡六と称し、二十歳のころ民平とあらためた<sup>(3)</sup>。かれは兄弟姉妹のない一人息子であった。生家跡は今日、大木公園として整備され、久米邦武の撰文を刻した顕彰碑が建っている。

佐賀の大木氏は、家伝によれば、藤原北家の末を称する下野宇都宮氏から分かれたものである。弘安年間（1278-1287）、元の再襲にそなえるため、鎌倉幕府は宇都宮氏の頭領宇都宮貞綱に九州下向を命じ、その弟泰宗が筑後国山門郡大木を本拠とした。その後、南北朝の争いが始まるにおよんで、筑後の宇都宮一族は征西宮懐良親王に従ったが、南朝方は次第に衰え、筑後宇都宮氏もまた零落した。応安（1368-74）のころ、泰宗四世の孫宇都宮久憲は、筑後国三潆郡の蒲池氏の養嗣子となり、その名跡を継ぐ。そして、旧知の土地である大木の城主だった久憲の甥宇都宮知長も、南朝と家名の没落を恥じて、大木知長と名をあらためた〔鶴久：1978；

大木遠吉 1915: 453-454〕。

ところが、近年の研究が明らかにしたところでは、筑後宇都宮氏が蒲池氏に転じたという説は、江戸中期に成立する『蒲池物語』にはじめてあらわれる創作といわれ、『蒲池物語』を下敷きにする、あるいは同じ伝承に由来する大木氏の家系も、そのまま歴史的事実と認めることはできない〔柳川市史編集委員会 2006〕。しかし、あくまでこれは後世の発見であるから、大木喬任本人は自らの出自を固く信じていただろう。大木氏は名流宇都宮氏の末葉、南朝遺臣の末と、友人副島種臣の大木喬任墓碑、嗣子大木遠吉の文章のいずれも、このことに疑いを入れていない〔副島 1900；大木遠吉 1915: 453-454〕。

蒲池氏重臣としての大木氏の行路は、ほぼ間違いのないものであるらしい。戦国後期の蒲池一族は、豊後の大友氏を後ろ盾に、筑後国で二十万石の版図を治めて「筑後十五城二十四頭の旗頭」といわれた。しかし、新興勢力である肥前の龍造寺氏が筑後へ進出をはじめたとき、当主蒲池鎮並は大友と龍造寺を天秤にかけて孤立し、それが蒲池没落の契機になる。天正9年（1581）5月、龍造寺隆信は猿樂興行を口実に蒲池鎮並を佐賀に招き、その帰途を襲って鎮並を自害せしめた。さらに、柳川を開城して恭順の意を示した郎党数百人も、隆信自身の娘である鎮並夫人をも含めて皆な殺しにされ、蒲池氏は滅亡した。大木城の大木統光は、前後四年弧城を守り、天正12年、鍋島直茂の勧めを入れて龍造寺氏に臣従した。大木喬任の家は、大木統光の五男知明が立てた分家にあたる<sup>(4)</sup>。

大木喬任の父、知喬は三十六歳で若死にした。母方の親類である大隈重信によれば、大木

が大酒を飲むところ、夜更かしをるところなどは、この父に似たのだという。父を亡くした大木は、家の刀が悉皆俺のものになった、これほど嬉しいことはないのだとうそぶいたというが、わずか十歳だった少年の強がりではなかったか [大隈 1900; 蒲原 1900b]。

一方で、大木は、思慮詳密、従容沈着の性を、母シカ子から受け継いだものらしい。夫の没後、シカ子は再縁を勧められたが、わが子の成長を見とどけたいと肯んじなかった。シカ子は大木に滋養をつけるため、みずから川にはいつて魚髓を捕ることまでした [大木遠吉 1915: 455]。大木家で一時同居した従姉妹がかいま見た母子の様子は、いかにも微笑ましい [蒲原 1900a]。

毎晩学校から飯を喰いに帰るのですが、お母さんが可愛いものですから、民平さんの帰宅時間までには野菜がすきだとして野菜ものを煮て待つて居なさるのさ。丁度今自分だと、茄子を細かに切つて能く煮て、之を大井に山のやうに盛上げて出されると、民平さん一人で皆な残らず立派に喰尺して仕舞ひますの。まあ能くもあの様にお中に這入ると思ふ程ですよ。

お母さんが裁縫の事は至つて腕利で有つたから、柔かな絹物をつなぎつなぎで胴着や下着を製造れた。それを直にずたずたに破つたり損ねたりするのですもの。上衣一枚丈は無疵の品で下着や胴着は立派に繕つて着せて有るのです。其れをね、人の居る前で上着をばいっと脱捨て、胴着ばかりに成るのですもの。するとお母さんは気を揉んで、おい民平それを脱いででは不可ないと云はれると、民平さんは平気な面色で「脱だらどう有るか」と云つて澄して居るのさ。

大隈は、シカ子について「賢母の誉れ高く、其薫陶は大に大木君が後年の地歩を成した事と思はれる」といつている。万延元年(1860)に没した母に、後年の榮譽を見せられなかったこ

とを、大木は永く遺憾とした [大隈 1900; 大木遠吉 1915: 456]。

## 第二節 藩校弘道館と枝吉神陽

大木の藩校弘道館への入学は、規定通りとすれば、天保十年(1839)ごろ、六、七歳で小中学校に相当する弘道館蒙養舎に入り、十五、六歳と長ずるにおよんで、内生寮での寄宿をはじめたはずである。副島種臣によると、同級には楠田英世、深川亮藏、一級下に高木秀臣、さらに二、三級下に江藤新平、中野方藏があった<sup>(5)</sup>。副島自身は大木より四歳上で、嘉永五年(1852)8月、皇学修行のため京都に出発するまで、同じく弘道館内生寮に起居していた [副島 1900; 龍造寺八幡宮楠神社 2006: 368]。大木もまた、二十五歳頃まで弘道館に身を置いたらしい。

佐賀藩の藩校弘道館は、天明元年(1781)、八代藩主鍋島治茂によって創設された。のちに「学問教育は佐賀を第一とす」といわれ、岩倉具視が子弟を佐賀へ送るほどの評価を得るが、これを成し遂げたのは、ひとえに大木喬任の就学と前後して断行された鍋島閑叟の改革による [植林 1970: 262]。天保元年(1830)年2月、十代藩主として襲封した鍋島閑叟は、同年閏3月に帰国、藩政の立て直しに着手した。そして、保育役古賀穀堂の建言を入れ、文武奨励の達を出した。人材育成をことさら重視した閑叟は、月一度欠かさず弘道館を訪れるほどの熱心さを示す [久米 1934: 97]。天保十一年(1839)、学舎は北の壕端へ移築、経費も現米百五十石から千石に拡充され、嘉永3年(1850)には課業法が布かれる。課業法とは、学問では独看、武芸では免状の最上位資格を持たない三十石以上の侍は、役人として採用をせず、さらに家禄の

十分の八を削るという「明清の登科及第法よりも厳酷」な決まりであった<sup>6)</sup>。

さて、弘道館の教育の中心は経学であり、幕府の昌平坂学問所と同じく、程朱学を教規とした。蒙養舎では小学、論語、孟子など経書の素読を習い、内生寮に進んで大学、詩経、書経、中庸、易などを学ぶ。このころ、弘道館を牛耳った教授草場佩川、武富圯南も、いずれも朱学者であった。

大木は、生来の寡黙な性格もあってか、周囲とあまりなじまなかったようである。十年近く、弘道館で大木の身近にいた長森敬斐は、「万事人の云ふ事を何とも思はなかつた、自分は自分流儀でやる風で有つた」という。そもそも風体からして、藩規に服は木綿に限ると定められていながら、大木は頓着せずに絹物を着た<sup>7)</sup>。他の生徒が膝がでるような短い袴で書生風を吹かせているのに、「ジョタジョタ」と長い袴を引っ張っているのも、まわりは「呉服屋の番頭」と悪口をした。そして、ほかの者との同席を嫌って、独り二階の物置に書棚と机を持ちこみ、読書に没頭した。副島種臣によれば、

大木君の学生時代も、後年と同じく、至つて寛容温雅の風で、而も機敏なる天才が有つて、毎に同窓の友を凌いだのは、拙者が能く知れる事実である。そこで同窓諸どもの多数は皆大木君を智恵者々々と云ふて、冷語かし、寧ろ憎嫉する気味の者が多い様子であつたから、自然に孤立の姿を呈した。

副島はさらに、「これは大木君の一生を通じても亦其傾きがあつた」という〔副島 1900〕。

嘉永2年(1849)、大木喬任が十七歳になった年、ひとつの転機が訪れた。副島種臣の実兄、神陽枝吉経種<sup>しんやうえだよしつねたか</sup>が、五年間の江戸遊学から帰

国したのである。兄弟の父枝吉南濠は、徳川將軍を君と呼ぶのは不当であり、日本の君主はひとり天皇あるのみという「日本一君論」を唱えた学者だったが、家学を継いだ神陽も、書三万巻を誦んじ、連日二十里を歩いて疲れを知らないという異才であった。

神陽の江戸留学中、昌平坂学問所で神陽に接した薩人重野安繹(のちの文部省修史官、帝大教授)は、「世の中に見て畏るべき者は無い、枝吉のみは其の言動に接する者は直に圧迫され、深く交る程畏敬の念を増す」といった〔久米 1934: 208〕。全国の秀才のあいだでも頭角をあらわした神陽は、学問所の書生寮舎長にあげられ、その感化によって同輩は六国史、令義解など国史国典を学ぶようになった。神陽によってはじまった学風の変化は、のちの昌平校の学規改革にも影響を及ぼしたといわれる〔高 2006: 284-291〕。

かくして、江戸で赫々たる実績をあげた枝吉神陽を迎えて、佐賀弘道館にも一大変化が生じた。経学と詩作を本分とする弘道館主流派に批判的な人々が、国学教諭に就いた神陽の周囲に集まりはじめた。弘道館史学派、枝吉学派とも呼ばれたかれらは、国学を重視し、学問の実用をことに重んじた。その象徴ともいべきものが、神陽帰国の翌年、嘉永3年(1850)に始まった義祭同盟である。それは、什物方を兼任して領内の史跡調査にあたった神陽が、西河内村梅林庵に楠木正成父子の古像を見出し、城下の龍造寺八幡宮に遷座して、楠公の命日である毎年五月二十五日に同志と例祭を執行したことに由来する。

大木喬任は、義祭同盟第一回目の会合から参加している。『鍋島直正公伝』によれば、大木

はこのとき最年少の参加者であって、その後、明治維新までの十八年間、大木は佐賀勤王党のひとりとして活動した〔久米 1920: 428〕。このあいだに、枝吉神陽をはじめとする年長者は相次いで物故し、神陽から「殊に沈才あり」と評された大木は、ひとりの少年から勤王党の中心的な存在に成長する〔長森 1900〕。元治年間、三十代前半の大木の姿を、支藩小城から弘道館へ留学した水尾訓和は、以下のように伝えている〔水尾 1900〕。

拙者は小城藩の命にて佐賀へ出て草場佩川先生に就きて学問をする事に成りまして佩川の塾に居りました。佩川先生に就きまして学問をして居るものゝ、当時流行の経学家に就きて経書を研究しますよりは、寧ろ勤王家の談話を聴聞する方は余程面白く感したものでゆえ、どうも其の傾きがありました。(中略)

当時にて学問も出来て勤王論を頻りに唱へた人は副島である。其次が大木である。副島は教授をして居られたから、其れに就て学問をするのも宜敷からんと(筆者注、すでに懇意となっていた)江藤新平の申さるゝ処から、江藤新平の紹介にて副島に面会をしました。副島さんには大学や中庸の講釈を拜聴したのであります。拙者が就きましてから間もなく副島先生は英学を研究するとて長崎に参られました。其処で副島先生が後には誰れに就きて学問をしたら宜敷からうと申した処が、それは大木民平先生が宜敷らうと云ふので、其から大木さんに就く事に成りました。(中略)

或日講釈中に大木さんは此の如く言はれた事があります。

「自己は今おれは斯様かうして居るけれどもが元来鍋島(ママ)の家来でも何んでもない。只た一時隷属をしたのである。源平の時でも源平が一時盛んになれば隷属者が出来る。衰ふる時には隷属者が減する様なものだ。」

など、申された。其他外史の論文など講せられる時にも、そんな例を引かれました。拙者は右の御咄で全く勤王の志を起しました。拙者が勤

王の志を起しましたのは全く大木さんの其の一言(ママ)で有ります。当時は余程イライ人だ、卓見な人だと思つて居りましたよ。

大木喬任の尊王思想は、確固たる自己認識、決して幸福とはいえない一族の歴史のうえに成立したようである。藩侯鍋島家への忠節を絶対的な価値観とする葉隠の精神、「釈迦も、孔子も、楠も、信玄も、曾て鍋島家に奉公したる事なき人々」だから崇敬にあたらぬという風土においては、恐るべき危険思想というべきであろう。勤王党に与することは、藩主より天皇を、藩よりも国家を先とする方向に進みうると、公然身をもって示すに等しく、かれらはほとんど「共産党」のように見られたという〔久米 1934: 319〕。枝吉神陽さえ、少なくとも表だっては「忠臣は考子の門に出つ。皇室に忠なる者にして何ぞ藩主に忠ならざらん。」と弁明せざるを得なかった〔大隈 1885: 50〕。俺は元々鍋島の家来ではない、という大木の発言には、相応の覚悟があつたはずである。

### 第三節 中野方蔵殉難

文久元年(1861)年10月、攘夷運動の巨魁、平野国臣が佐賀に来訪し、枝吉神陽と面会した。このとき、同座した大木喬任(民平)、江藤新平、古賀一平(のちの品川県知事)らの志に感銘を受けた平野は、諸国遊歴のあいだ、佐賀に三平ありと推賞した。しかし、大木、江藤が深く交わつたのは、実際は古賀一平よりも、前年春から江戸留学の途に着き、平野国臣とはついで会わなかつた中野方蔵であつた。大木、江藤、中野が断金の交わりを結んだ事実は、三者間の書翰が証左するうえ、「大木君は殊に此兩人(江藤、中野)と気合が適した所があつた

と見へて、<sup>(ママ)</sup>尤も深く交はられた」(副島種臣)、「江藤と大木とは殆んど離るべからざる無二の朋友で有つた、又政治上に於ても相離るべからざる関係が有つた」(大隈重信)という回顧談があり、中野方蔵の伝記も、かれらが「血を啜り合つた兄弟とも謂ふべき濃密な関係」にあってと論じている。[副島 1900; 大隈 1900; 相馬 1936: 101-108]。

以下に掲げる江藤新平宛大木喬任書翰下書は、憲政資料室大木喬任文書中のもので、これまで未紹介だと思われる資料である [大木喬任 年不明; 重松 2007b]。おそらく、明治六年政変後、佐賀へ向かう直前の江藤へ宛てて書かれたと思われるが、弘道館時代の大木、江藤、中野の様子、そして嘉永年間からの活動が、後々にいたってどのような影響を及ぼしたかを窺わせる。

正四位大木喬任、書ヲ正四位江藤新平君ノ足下ニ致ス、不佞之ヲ聞、交浅而語深者妄也、交深而語浅者詐也、二者君子ハ不為也、今也書ヲ足下ニ致ス、唯恐負君子之義、是以敢不隱中情

不佞ト足下相交也竹馬之遊より以テ今日ニ至ル迄二十有余年、対テ同書ヲ読み炉ヲ共ニシテ相語ル、一日不見其思三状、一肴之菜必相与、一瓶ノ酒必分而相飲、疾病相救、患難相共ニシ、相共拜父而父ト呼ビ、相共母ヲ拜而母ト称スルニ至ル、此時方テ兄弟之間親戚之際ノ事ト雖、猶ヲ款ヲ寄ル人士多シ雖トモ、交リ博シト雖トモ、足下及中野晴虎ト不佞ト之交ノ深きか如きもあらざる也、而晴虎嫌疑離り獄中ニ死、從是相共談者余ト足下ノミ、而其交也日一日ヨリモ深く、二十余年ヲ経而不易以テ今日ニ至レリ、夫如此ユヘンノモノ一事相合之一物ノ好ヲ以テ豈其然ラン乎、其志望相合而其心相同ヲ以テ也

嘗テ窃ニ往事ヲ想懷スレバ不佞年十八九、足下及晴虎十六七、相共在学校、共史ヲ読テ、元弘中興ノ業一朝而覆り、皇基再造之凡一日ニ而没シ、皇綱再紐ヲ解き、<sup>(皇)</sup>陽泉欲ヲ逞シ、忠臣義士之憾千

歳不<sup>(明説不能)</sup>□ル至ルニ及テ、相共ニ手ヲ執テ、而慷慨切齒セズンバアラザル也、相对而酌毎ニ必ス談此ニ及、晴虎常ニ起躍、而劍ヲ拔キ案ヲ碎キ、泣下者数行、即チ歌呼、歌鳴々とし而歌テ曰、身可死兮骨可碎、安可不為名分大義、生為忠義之臣兮、死為忠義之鬼

書翰中の年齢表記は、数えによるものだろうから、大木が江藤、中野と史書の講読会をはじめ、激情にかられた中野方蔵が机を叩き割つたのは、嘉永2年(1849)から3年にかけてということになり、嘉永2年夏に帰国した枝吉神陽の影響を考えるのが自然である。また、中野方蔵が大木と知り合ったのは、中野が大木家の隣に越してきた十六歳ころとされ、講読会と時期を同じくしている [相馬 1936: 76]。大木と江藤との関係も、「不佞ト足下相交也竹馬之遊より以テ今日ニ至ル迄二十有余年」という一節から逆算すると、同様に嘉永年間に親交がはじまったと考えられようか。

物成四十五石の大木、五十石の中野に比して、江藤の禄米はわずかに十五石前後、侍からは一段下の手明鐘という階級に属した。身分制度を社会秩序の根本におく当時、この差は今日想像する以上に、大きかったはずである。それにもかかわらず、かれらが思想を同じくし、苦楽を分かち、互いの父母を自らの親同然としたことは、そのつながりがいかに深かったか、よく示している。

資料中の中野方蔵の獄死とは、文久2年(1862)年5月、江戸留学中であった中野が、坂下門外での老中安藤村馬守襲撃事件への関与を疑われて捕縛され、小伝馬町の牢獄で落命した事件を指す。幕末の騒擾から距離をおいた佐賀藩では、中野は数少ない勤王運動の犠牲者で

あった。大木、江藤をはじめ、同志たちは懸命に藩政府にはたらきかけたが、ついに中野は救われなかった〔大隈 1885: 58-60〕。

江藤宛書翰は、続いて中野の遺志に言及する。

晴虎将死以書足下及余二贈ル、其書二曰、王室不興即名分不明、名分不明即国体不堅、国体不堅即四方成侮、四方成侮即民不安、志士仁人尚欲有為以務明以大義名分自可任而已矣、又曰、衆力不一即国勢不振、国勢不振即四方來侮、当今之時欲分衆力振国勢、宜大義名分碎幕府之大塊、而各藩凸凹而已多、晴虎之議足下及余素り之ヲ服ス、

死に際した中野が大木と江藤に送った「書」とは、中野方蔵伝記中の「固本盛国策」である。原本は今日の大木文書に残っておらず、資料形態からの考察はできないが、以下に引用する中野の主張は、大木書翰の記述と一致している〔相馬 1936: 付録21-22, 64-67〕。

夫固本盛国之先務者、在使将家復政於王室以一人之心、使

天子改正官制退愚弱公家以用天下英士也、国賊源頼朝、不補正王室、却幸

王政廢壞、構賊窟於鎌倉、終欺公家而盜天下之万民、上掠 朝廷之政權、猥擬君位、以臨天下、悖虐極甚、(中略)、天下之人亦雖暫服其恩威、然豪者謀乘隙而自代之、愚者唯服其恩威故、有他恩威盛、即終反之、是無万古不易之大名君臣固定之厚義故也、因此頼朝以来人心不一、天下屢大乱、四境益荒、国勢不振、英如豊臣秀吉亦不自征服朝鮮、豪如源家光亦不援明人、衰頹日萎靡、終至今日、方今洋夷暴戾、窮其醜

(それ本を固め国を盛んとするの先務は、将家をして政を王室に復し、以て人心を一にし、天子をして官制を改正し、愚弱の公家を退け、以て天下の英士を用ひしむるに在る也。国賊源頼朝、王室を補正せず、却って幸いに王政を廢壞す。賊窟を鎌倉に構え、終に公家を欺き、而して下は天下の万民を盗み、上は朝廷の政權を掠め、猥りに君位に

擬し、以て天下に臨む。悖虐極めて甚し。〔中略〕。天下の人また暫くその恩威に服すと雖も、然も豪は隙に乗じて自ら之に代わらんと謀り、愚はただその恩威に服す。故に他に恩威盛んあれば、即ち終に之に反す。これ万古不易の大名君臣固定の厚義なき故なり。此に因り頼朝以来人心一ならず。天下しばしば大乱し、四境ますます荒れ、国勢振るわず、豊臣秀吉が如き英もまた自ら朝鮮を征せず、源〔徳川〕家光が如き豪もまた明人を援けず、衰頹日に萎靡し、終に今日に至る。方今洋夷の暴戾、その醜窮まる。

明治19年(1886)、大木は麻布賢崇寺に中野方蔵の墓を建て、墓誌銘もみずから撰文したが、そこでも大木は「固本盛国策」に触れている。中野方蔵との交友の思いでとして、それは決して欠くことのできない存在だったのだろうか〔相馬 1936: 162〕。また、「固本盛国策」の「本を固くする」という表現が、明治6年の江藤宛大木書翰案では「国体」の語に転化されていることに留意したい。実はこの大木書翰案は、当時文部卿になっていた大木喬任が意見書草稿をかきとめたノート、『大木喬任伯意見雑記』中に綴じられたものであって、当然ながらそこで記述は、中野の没後十有余年を経てのちの大木喬任の意識を反映する。そして、『意見雑記』中の草稿は、いかに国体概念を国民に周知せしめるかの議論がほとんどであった〔重松 2007b〕。文部卿大木が国体を論じるとき、中野方蔵とその殉難が自然と想起されたのではないか。そのとき、「国体」はただの抽象的概念でも方便でもなく、友人がまさに殉じた現実のものと感じられたであろう。

大木書翰案には、さらに続きがある。江藤と大木が中野の遺志を了解したところで、数行の抹消があるが、そこにははじめ、以下のような記述があった。

余又夙ニ獎言ヲ著スル志アリ、之ヲ足下ニ談ル、足下之ニ同ス、草稿□成ル、之ヲ足下ニ示ス、足下亦之ニ同ス、両言、一ハ獎言、一ハ鑑言、獎言ハ元弘中興ノ大業速ニ成ヲ□キ而後來ヲ獎スル也、鑑言ハ建武覆没ノ事由ヲ写シテ而後事ヲ鑑スル也

「獎言」と「鑑言」は、後年の筆写による「獎言」冒頭部分が伝わるのみであって〔大木喬任年不明a〕、執筆時期も決して定かではないが、その主旨と書翰の文脈から推して、中野方蔵が大まかに述べた史観を詳らかにし、敷衍せんとする試みだったように思われる。仮にそうだったとして、中野方蔵を失い、江藤が脱藩を執行する一方、大木が文章を選んだ理由は、何だったのだろうか。

#### 第四節 大木喬任の学問

ここであらためて、在藩時代の大木喬任が何を学んだのか、考えたい。以下は、息子の大木遠吉の著作にあらわれた回想である〔大木遠吉1915: 439〕。

我輩の亡父は、朝廷に仕へてからは種々の政務にたづさはつた。自分の口から云ふのは異なるものであるが、亡父は学問が深い上に、普通の腐儒と異つて、応用の才幹に富んで居つて、施設宜しきに適つたものである。是れを見て、当時の学者で、今なほ生きて居られる、和漢洋の学に通じ、一世の欽仰した土佐の人細川潤次郎氏は、亡父に向つて、どうも貴方は、学問が深い上に、応用の才に富んで居られる。佐賀藩は学問の発達した所であったが、草場佩川などが、貴方の先生であつたのかと問はれた。

亡父は佩川は師匠でも何んでもないかと答へた。『それなら誰れが先生ですか。』『いや誰れが先生と云ふ事はありません。所謂学問に常師なしで、誰れが先生と云ふ事もなく、誰れの感化を受けたと云ふ事はありません。』併し何かあるだらう。こころひそか心密に私淑する人物があるだらう。古今東西を問

はず、誰れか無ければ、標準が立たない様には思はれます。』『さう云はれは、御答へするが、何を隠さう、自分は、実用の才幹を具備する所からして、秦の商鞅を傑いと考へる。兎角世の俗儒が攻撃するが、商君はなかなかさう安つばい人間ぢやないと思ふ。併し、之れを先生とも師匠とも思つて居るわけではない。支那の歴史中の人物では活潑の働きをやつた商鞅を推すので御座います。』亡父が斯う答へると、細川潤次郎氏は商君とは驚いた。商君は、学者の風上にも置けぬ人間である残忍無道の人間である。学問をしたものが、商君を模範とするなどは以つての外の事である。意外千万であつたと云つて、果ては一場の小笑話に終つたと云ふことである。

是れは、亡父が我輩に話された處であるが、亡父は、商鞅を理想の人間と思つたわけではない。当時固陋の儒者は、朱子派の儒学の糟粕のみを嘗めて、空理空談を事として居つたが、維新草創の際、百事に手を着けなければならぬ時に當つて、坊主臭い論議の不可なると痛感して、奇抜の人間として商鞅を挙げたのである。亡父は必ずしも、商鞅を思想的人物と思惟したのではない。真意は、維新の大業を成就するには、商鞅の如く、才幹英気あつて、快刀乱麻を断つ底の手腕家を俟たねばならぬと云ふのが其の真意である。

初代司法卿となり、みづから定めたところの法制度によって裁かれた江藤新平が、「我国の商鞅」と呼ばれた事実を鑑みると、この逸話はさまざまな意味を持つように思われる〔大隈 1885: 690〕。ただ、この一言をもって、大木が草場佩川のみならず、枝吉神陽をも教師とは仰がなかったと受け取るべきではあるまい。大木自身が神陽に言及する資料は未見であるが、神陽の薫陶が大木にも及んだと、同輩多数の証言がある。維新を迎えたとき、大木は既に齡三十五、神陽が没した年齢に近かつた。学問でもおのずと一家を成し、自負するところがあつたと解するべきでなからうか。

佐賀時代の大木の学問について象徴的な出来



事は、安政年間と思われるが、大隈重信からの蘭学研究的の誘いを謝絶したことである [大隈 1900]。後年、副島種臣は長崎致遠館で英学を学び、江藤新平も、佐賀県立図書館の文書に化学の自習ノートを残しているけれども、大木ひとりには、積極的に洋学と接点を持つとした形跡がない。

一方、細川潤次郎との教育談で商榷を持ち出したことからうかがえるように、大木の素養は中国史に深く学んだことが特徴であった。大木といえば漢学、大木といえば歴史学と、旧佐賀藩の同輩も明治政府における部下たちも、見解をほとんど同じくしている [石橋 1900; 副島 1900; 水尾 1900; 磯部 1901; 高木 1900; 中川 1901]。

大木さんは歴史がお得意で殊に通鑑を能くお読みに成りました。随て歴史上の事を能く承った。(石橋重朝、旧佐賀藩士)

大木君が童子たりし時分の学問の材料は、文選など能く読まれた。夫れから十七八歳以後は、専ら資治通鑑を読まれたのである。後年天下の経営とか、何とか云ふ様な考案は、重に此資治通鑑から材料を取られたものと思はれる。斯く熱心に歴史を研究されたと申した処で、尋常の学者が歴史を読むとは違ひて、要点をよく注意して天下の経営に資するのを目的とせられたのであつたから、所謂歴史家の研究とは、大に趣きが異なるのである (副島種臣)。

(筆者注、大木の学問は) 博く見て居られるが、総て大眼目を見て取つて実用にすると云ふ風で、歴史なら盛衰興亡治乱の因て分るゝ処などあると其を委敷取調てまた人に向ても其を質問するのである。拙者は一年も就学して居りましたらうか。其間に種々の質問を出される。此方からも質問をすると、大木さんは貴様は左様質問するが一体どう思ふかなど、反問を<sup>(ツツ)</sup>しられる。反問が御得意で有つた (水尾訓和、旧小城藩士)。

大木さんは…種々な方法を以て書生を試みられました。殊に左の重要な事を申された。貴様達書物を読んで何うするか。歴史を読むときには必ず治乱盛衰興亡隆替などの事が出て来る。先づ書中に左様な大事件が出て来る。其の時には先づ書物を閉ちて仕舞ふて自分が其の時代に宰相と成つたと仮定する。宰相の覚悟にて此の舞台にあらはれ、自分は此の事件を如何に処置するか考案をめぐらすが宜敷い (磯部四郎、司法官僚)。

(筆者注、東京遷都は) 賈誼か晁錯の献策でも読んで考付いたものだろう (高木秀臣、旧佐賀藩士)

大木さんは矢張り新しい新しいと思つて成さる様では有るけれども、根が漢学者であるから、新分子三、旧分子七、と云ふ配合ですわい (中川元、文部官僚)

枝吉学派は、もとより古事記、大宝令などの国典研究、国体論の唱道がその第一の特徴であったが、歴史研究においては、中国史も同様に重視されていた。学派中で中国史に眼をむけていたものに、神陽の従兄弟にあたる木原弘三郎もいた。木原弘三郎は、若年から「歴史に心を潜め、明の袁寅が綱鑑の巻首に歴史研究の着眼すべき要点は『一代の統体を見、一世の機括を見る云々』の語を発見し、反復表裏に揣摩して書生を風動し、歴史学の思想を鼓動」した。嘉永初年に早世する木原と、大木との関係如何は、残念ながらよくわからない [久米 1934: 209]。

そして、維新以降も、大木の指向は変わらなかつた。いくつか例をあげると、明治初年、洋学の流行によって反故紙同然になった漢籍を、大木は「大七車か、大八車に山を成すほど何輛と云ふほど」買い取つた [浜尾 1900]。明治18年 (1885) には、佐賀で小学校がつくられると聞き、「万卷中の華」として朱子の『小学』と

その注釈書をカリキュラムに取り入れるよう勧めたりしている [重松 2007a: 135]。こうした歴史学と漢学を重視する学問的傾向が、大木をして「奨言」「鑑言」の執筆に向かわせたのではないだろうか。

## 第五節 佐藤信淵

大木の学問のもうひとつの特徴は、江戸後期に異才を振るった学者、佐藤信淵への接近である [森 1942; 稲 2001]。大隈重信は、晩年の談話筆記録『早稲田清話』中で、「大木（喬任）は普通の漢学者と違ひ、佐藤信淵の書をも読んで農政にも通じて居た。農政学者で有つた。是が御維新の初に智慧を出して小金ヶ原（筆者注、別名小金牧、現在の千葉県北東部に存在した幕府の軍馬放牧場）の開墾などを企てた訳さ。此事では当時我輩と意見の衝突を来したものだかね。」と、大木の本分が農政にあったと知っている [大隈 1922: 464]。

また、義祭同盟の同志である楠田英世も、大木と軍書講読会を行ったが、楠田が特に記憶に残るものとしてあげるのは、軍書でも史書でもなく、佐藤信淵の著述であった。

佐藤元海（信淵）の農書は余程我輩共に利益を与へました。拙者も農書が好きだが大木も極々好きのさ。そこで或日大木と申す事には、御同様こうして居ても昔から今日まで人間の分限が極つて居て馬鹿でも伶俐でも分限で論じるのだから何とも致方がない。寧ろその事に御同様農書を読んで置て大農に成うじやあないか。それは宜かろう、それは妙だと申した様な事があつたのさ。佐賀では士が農にはなれたからね。

兎に角この佐藤元海は傑物だ。閑叟公のお土産に佐藤の『氣候審験録』と云ふ書物が有つたが、仲々利益になつた。それから『六部交渉法』、『山相秘録』などもある。佐藤は又薩摩へも抱へられ

た事があつて農事に力を尽し『薩藩経営録』と云ふ書物が出来て居るが、此の書物をも見たが是れ亦た余程利益がある。其他『漁村維持法』、『会津漆園法律』、『土性弁』などもある。

小金ヶ原開墾のほかにも、大木喬任が農政を重視したことは、東京府知事として「桑茶政策」を導入した事実からもうかがえる。桑茶政策とは、大名と家臣団の帰国によって、深刻な不況に陥った東京市中の救済策として、荒廃した大名屋敷を畑に変えて茶と絹をつくるという苦肉のアイデアであった。桑茶政策はほとんど失敗に終わったといわれるが、ここでは触れない。大木が東京府知事に擬せられた理由は、東京遷都の主唱者であったことにくわえて、大木は民政に通じていると鍋島閑叟が推挙したからだという。それは、大木が佐賀の代官所につとめた経験をいうのであるが、そもそも英学研究を拒否して代官所の役人になるという選択も、一時は大農を志したという大木の思想傾向が後押しをしたのではなかろうか。

大木遠吉は、父喬任への信淵の影響が農学にとどまらなかったと知っている [大木遠吉 1915: 477-479]。

（鍋島閑叟は）当時幕府の忌諱に触れて、流布本の少なかつた平田篤胤の著書の如きは、手を尽して集め、本居宣長の著書の如きも大部求められた。殊に当時有名なる農学の泰斗秋田の人佐藤信淵の著書迄も集められたるは、如何に書籍の収集に熱心であつたかを示すものである。信淵は『草木六部耕種法』と云ふ全く専門の農学の著書がある。信淵の農学に於ける著書は多少世に残つて居らうと思ふが、不思議な事には、此の人の『図南図北』と云ふ著書が佐賀藩に集められて居つた。之れは幕府の処置として、絶版せられたとの由である。（中略）

其の『図南図北』とは如何なる書かと云ふに、

日本の国防策である。防備と云つても、消極的な、退嬰的な防備ではない。積極的な、攻勢的な防備である。北は露国に対する防備を説いて、単に蝦夷、カラフトの辺境を固守するに止まらず、カムサツカ半島を攻略して、攻撃的態度の防備を為す可しと論じて居る。図南策の南とは何処かと云ふに、台湾、ルゾン、マニラ及びシンガポールの界隈を指すのである。(中略) 其の実行方法がまた卓見である。日本全国に有り余る浮浪を駆つて、ルゾン、マニラ、ボルネオ、スマトラ、セレベス辺に大集団を送り出せ。無頼の徒をして、是等の土地に、どしどし国旗を樹てさせよ。時は今日である、機会を失ふなかれ、後日発言の権力を得る為めに、至る所に国旗を立てよ。是れが為めに国内では無頼の徒を一掃する事が出来、且つ国力発展の端となる。是れと、将来南方に於いて種々の因縁を付けるのが必要であると云ふのである。

嗚呼斯くの如き忌憚なき発展策は、深く当時の有司に諱まれたもので、なかなか多くの人の眼に触れる機会がないにもかゝらず、閑叟公は何処で聞き込まれたか知らないが、労と費とを惜まずして買ひ求められたものであるといふ。此佐藤の話は亡父が時々我輩に談ぜられたので、今に記憶に存する次第である。

『大隈伯昔日譚』でも、閑叟がはじめての帰国の際、信淵の農書を佐賀に持ち込んだとされている[大隈 1885: 64]。ただ、佐賀の諸文庫には少なからぬ信淵の著作が残っているものの、楠田英世が掲げる六冊のうち、確認できるものは『土性弁』のみである<sup>(8)</sup>。『図南図北』なる書も見つからない。もちろん、写本に別題が付されて書庫中にまぎれている、あるいは散逸の可能性等も考えられようが、農書については、楠田の記憶違いが少なくないようである。というのも、『気候審験録』と『漁村維持法』は、明治九年以降に刊行されてはじめて世に出たらしく、『会津漆園法律』は他の信淵の著述に言及されるのみで、失われたとされている<sup>(9)</sup>。維新以前に、佐藤信淵のなんらかの農書を大木と

楠田が読み、いたく感心して帰農まで考えたというはおそらく事実であろうが、いったいどの著述であったのかは、よくわからない。

信淵の世界戦略論では、『宇内混同秘策』がもっとも広く知られている。「大地の最初に成れる国にして世界万国の根本」たる日本には、世界を一統に治めて蒼生を安んずる義務がある、第一に満州、続いて中国全土を併呑せんと説く、戦前は予言の書として一部で珍重された著述であった。そのなかで信淵は、世界進出の準備段階として、郡県制を布き、都を江戸に移して東京と呼ぶことを主張する。したがって、遷都の主唱者たる大木が『宇内混同秘策』を読んでいたとすれば、生前はほとんど世に入れられず、しばしば山師よばわりされた信淵にとって、大きな足跡を残したことになる。だが、『宇内混同秘策』は、信淵自身が世をはばかって筐中に秘したために、維新以前はほとんど流布しなかった<sup>(10)</sup>。大木が読んだ『図南図北』は、浮浪の徒を用いてカムチャッカとフィリピンへ進出するという主旨からして、文化5年(1808)に信淵が書いた『防海策』だったらしい。こちらは秘本でも禁制書でもなく、いくつかの叢書に転載され、写本も多く残っており、信淵の著述としてはかなり広く読まれた方であった。

ところで、吉田松陰も、『防海策』と信淵の農学書を読み、「読経済要録」という一文を残している[山口県教育会 1972: 50, 409, 424-443, 495-498; 森 1948]。大木は、しばしば息子に信淵について語り、父を深く敬していたその息子が「卓見」だというのだから、『防海策』についても決して悪し様には思わなかっただろう。大木は明治2年頃、征韓論の先駆ともいべき

大陸進出説を唱えてもいる。しかし松陰は、佐藤信淵の世界戦略論について、大木と異なり否定的であった。

嘉永3年(1850)秋、はじめて藩境をこえて九州を遊歴した吉田松陰は、平戸で天山流砲術師範豊島権平に入門したが、そのとき借覧した書籍のうちに、信淵の『防海策』が含まれていたのである。当時、松陰は若干二十歳とはいえ、養家吉田氏は山鹿流兵学師範の家柄であり、松陰自身も藩主へ数度、孫子等を講義した経験があった。その松陰にとって、『防海策』が説く世界進出の術策は、ひたすら「夸誕」にうつった。つまり誇張の甚だしさ、大風呂敷を松陰は嫌って、信淵の「人と為り」に服さなかった。のちに、信淵が津藩で稲作を全廃して草綿に代えよと献策した顛末も聞き、その粗雑な議論から推して信淵に学ぶべきものはない、と松陰は考えた。

くだって安政三年(1856)、来航した黒船に接触し、アメリカに渡ろうとして罪を得た松陰は、野山の獄中で信淵の『経済要録』と『農政本論』を読んだ。信淵の農学にはじめて接した松陰は、それまでの評価を率直にあらためて、『読経済要録』を書いたのである[森 1948]。

佐藤百祐(信淵)の経済要録七巻、開物篇は土石草木の活動を論じて臚列遺す無く、而してその創業富国の諸篇は、尤も能く大体に通じて実事に切なり。誠に民事の宝籍にして、本邦農家未だ之れが先あらざる也。(中略) 近日人あり。此の編及び農政本論を以て借示す。囚中事無し。巻を發きて細観して大いに実得あり。而して此の編尤も能く簡括痛快にして、民事に在りて最も関くべからずと為す。蓋し佐藤氏、農学はその出する所にして、而して施して他事に及ぶ者は失無きこと能はず。然らば即ち、一を觀て百を疑ふは吾の過也。一を執りて百を論ずる、亦百祐の過也。

「読経済要録」は、当初、信淵の農政学も「机上に於て成つた…何ぞその迂遠なるやといひたくなる」議論だと痛罵した森銑三をして、「怪し気な兵学はさて置いて、その農政学だけでも、純然たる学問の見地から見直してくれる人が現れるならば、私はそれを大きな喜びとしたいと思ふ」といわしめた[森 1942: 273; 森 1948]。松陰の信淵評はまた、信淵の農書の価値を弁護するにとどまらず、農学に当時どのような意味があったか、よく表しているようである。濫読癖のあった松陰は、信淵作述のほかも少なからぬ農書を読み、特に『経済要録』は松下村塾の門弟である吉田稔麿、増野徳民への講義にとりあげている。農学は、有志者にとって、決して等閑視すべきものではなかったのである。

大木喬任が佐藤信淵に入れ込み、農政家といわれた背景には、松陰と同じように、農こそ「民事に在りて最も関く」べからざる存在とする考えが、根本にあったのではないだろうか。それは、みずから民平と称して、東京府知事となったとき、今度の知事はそんな名前か、ならば大きに民は平らかならん、と冗語されたかれにとって、その名にしおう学問の傾向だったといえるだろう。

## おわりに

鳥羽伏見の合戦後、幕府崩壊が現実となるなかで、佐賀藩も遅ればせながら中央へ進出した。副島種臣、大木喬任、江藤新平、大隈重信らは、それぞれ己の才覚をみとめられて、新政府の要職にあげられるが、わずか数年にして、かれらは袂を分かつことになる。すなわち、明治6年(1873)の征韓論争によって、副島、江

藤が野に下り、翌年、江藤は佐賀戦争の首謀者として処刑された。明治14年には、政権奪取の疑いをかけられた大隈が放逐され、大木ひとりが政府に残る。大隈はいう [大隈 1900]。

維新後に相成ると、既に世人も承知の通り副島、大木、江藤及び我輩共、直に枢要の位置を占めたが、元来一書生として懐抱し居た理想を直に事実の上に行ふと云ふ地位に成つたので有る。是に於て地位と責任との境遇から議論が一致すべき筈なるに、大木副島及我輩三人の間に何うも議論を異にしたと云ふ不幸が起つた。然りと雖とも、元来同志の者なれば、公事上、国家の経綸上に就ては度々争論も致したが、決して其が為めに私交上に差支を生しなかつた。畢竟我輩等の素養が充分の根底を有し居り、私の為めには公事を枉げざる精神で、国家の大責任を保有する以上は、斯る異議を為すは甚だ正当なる举措である (傍点筆者)。

大隈重信研究の第一人者たる渡辺幾治郎は、この発言を一般向けの書籍に引用する際に、「畢竟我輩等の素養が充分の根底を有し居り」という一節を「われわれの学問の素養にそれぞれ根底があり」と改めた [渡辺 1958: 60]。前後の文脈からしても、この解釈は当を得ている。つまり、佐賀閥の政治家たち、枝吉神陽の門下生たちが別々の道を選択した理由は、維新以前の学問と経験にあったことになる。

本稿では、青年期の大木喬任を理解するために、国体論、歴史学、農学という三つのキーワードを見出した。国体論は、大木のみならず、勤皇党に属した誰もが共有した理想であった。一方、歴史学は、大木喬任において、最も特徴的な学問の傾向であった。そして、広く古今の歴史をみた結果として、大木は農こそ人間の本分、古今変わらない治国済民の大本と考え、農を以て幕末明治の問題にあたらうとした

のではあるまいか。

この伝統的な経済社会観は、最も影響を与えた書物としてオランダ政典を挙げ、長崎時代には商人と緊密につきあい、終生、理財への明るさを誇りとした大隈と、いかにも対照的である。同じ勤王思想から出発し、同じ勤王主義者として終わった大木と大隈が理想とした国家像は、ともに忠君愛国を旨としたのであって、少なくとも今日からすれば、大きな径庭があるようには思われない。しかし、歴史に眼を向けた大木と、長崎にあって西洋列強と常にふれあっていた大隈では、たとえ目指すところが同じであっても、政策上に相違が生じるのは避けられなかった。そして、過去からのつながりよりは、転換と決別を選択せざるをえなかった明治という時代であって、大木喬任の学問の方向性は、やはりかれの思想と活動中に、ひとつの限界となったのではないだろうか。

[投稿受理日2005.5.30/掲載決定日2005.6.3]

[本研究の遂行に際しては早稲田大学特定課題研究助成費の支給を受けた]

#### 注

- (1) 特に注記をしない歴史的事実は、島内 [2002]、副島 [1900]、大木 [1905] 等の基本資料から引用した。なお、本稿中の年齢は、可能な限り満年齢で表記した。
- (2) 大木喬任家の禄高は物成40石、あるいは50石などの説があるが [荒木 1901]、ここでは慶応3年惣番秩禄の記載 [高野 1994: 14] を典拠とした。
- (3) 郷友荒木博臣は大木が嶺六から民平と改名した時期を二十五、六歳のこととするが、楠公義祭同盟連名帳での署名をみると、嘉永5年(1852)5月から7年5月の間、大木が二十歳前後の改名だったらしい [荒木 1901; 楠公義祭同盟結成百五十年記念顕彰碑建立期成会 2003: 118-120]。嘉永6年の黒船来港が、契機となったかもしれない。
- (4) 大木統光の直系は、代々主計と名乗り、物成

三百十石、家格は着座（佐賀藩独自のもので、藩主親類と家老に次ぐ）であった。平侍以上の家格では、佐賀の大木氏は、幕末までに六家に分かれていた〔鶴久 1978; 高野 1994: 索引13, 87-90〕。

(5) 副島種臣はのち伯爵・参議兼外務卿、楠田英世は男爵・司法省明法寮頭・元老院議員、深川亮蔵は鍋島侯爵家家令、枝吉豊三郎は副島種臣の実弟で維新前に早世、高木秀臣は東京控訴院検事長、江藤新平は参議兼司法卿、中野方蔵は本稿第三節で詳述。本稿でも多く引用したかれらの懐旧談は、憲政資料室大木喬任文書の『談話筆記』に残っているもので、これらについては重松〔2006〕を参照されたい。

(6) ただし、課業法は弊害も少なくなかったので、安政6年（1859）に廃された。大隈は、「頑固窮屈なる朱子学を奉せしめ…一般の人物を悉く同一の模型に入れ、為めに、個儻不羈の氣象を亡失せしめたり。…佐賀藩の学制は、豈に餘多の俊英を駆りて凡庸たらしめし結果なしとせんや」と厳しく批判している〔大隈 1895: 2-3〕。

(7) 蒲原源子等の話では、絹は裏地に使い、表は木綿だったというが、それでも同輩の多くは、大木は絹物を着ていた、と語っている。大木は、夜具まで絹製で、表は鹿の子、裏は赤という掻卷（着物状で綿入りの寝具）を使った。ある時、肥後藩士某が弘道館を訪れ、そのまま泊まることになったのだが、不在だった大木の夜具をあてがわれたかれは、「こりゃ何か！」と叫び、その派手な掻卷を三度、放り投げたという。荒木〔1901〕はその肥後藩士を「空閑（久我）次郎八」とするが、義祭同盟の先輩に同名の人物があり、何らかの記憶違い、記述の誤りがあったかもしれない。

(8) 佐賀諸文庫中の佐藤信淵の著書は、本藩鍋島家文庫に『農政本論』（目録番号991-1483）、『土性弁』（991-1433）、『内洋経緯記』（992-683, 684）の三種の農書があり、支藩では、蓮池鍋島家文庫に『存萃控狄論』（991-235）、小城鍋島文庫に『防海策』（361-3, 『近時海国必読書』巻八所収）、『呑海肇基論序』（361-4, 『海防彙議』巻十二所収）、鹿島家祐徳文庫に『農政本論』（8門2類, 函2-113, 明治4年の刊本か）、『十字号糞培例』（8門2類, 函2-89, 明治5年の刊本か）、『兵要一家言』（4門14類, 函14-240）、『呑海肇基論序』（4門14類, 函14-140, 『海防彙議』巻十二所収）、『三銃用兵論』

（4門15類, 函15-24）が認められる。藩校弘道館旧蔵書、武雄鍋島家文書に信淵著述は見あたらなかった〔県社祐徳稲荷神社社務所 1930; 佐賀県立図書館 1982; 佐賀県立図書館 1985; 佐賀大学附属図書館 1962; 白川武人他 1991; 武雄市教育委員会 1983〕。

弘道館旧蔵書に信淵著述が存在しない理由として、信淵の農学、政治論等は、学校で養われるべき教養とは見なされなかったと考えられる。大木もあるいは、弘道館を離れて代官所に勤めるようになってから、信淵に接したのではないだろうか。

また、久米邦武の旧蔵書に、いずれも明治以後の刊本であるが『十字号糞培例』、『土性弁』、『培養秘録』、『草木六部耕種法』が残っていることは興味深い。久米は、『欧米回覧実記』執筆の功による下賜金千円で、目黒に土地を購入し、開墾計画を自ら練るほど熱心であった。信淵の農書も、その研究の必要から、揃えられたものかもしれない。とにかくも、明治初年以後も、信淵の農学は相当権威あるものされたのではないか〔久米美術館 2000: 付録23〕。

(9) 『国書総目録』によると、巷間によく受け入れられた信淵の著述、すなわち『農政本論』、『経済要録』、『西洋列国史略付防海策』、『山相秘録』、『草木六部耕種法』、『薩藩経緯記』等は、全国にそれぞれ十点前後の写本が残っているが、『気候審験録』は秋田市立図書館の佐藤家旧蔵本と信淵研究家であった織田完之に由来する内閣文庫本の二点、『漁村維持法』は内閣文庫の自筆本のみ、『会津漆園法律』は著作目録では散逸したことになっている。『国書総目録』は、千葉県君津郡の山中進治旧蔵書に信淵の『漆園叢書』があったというが、今日山中文庫は所在不明で、それがどのような性質の著述であったかはよくわからない。

(10) 鶴田〔1941: 37〕は、大阪遷都を唱えた大久保利通も『宇内混同秘策』から着想を得たという説を紹介するが、川越〔1997: 436-439〕によると、信淵は『宇内混同秘策』を秘本としていた。

#### 参考文献

荒木博臣. 1901. 「荒木博臣殿御談話拜聴筆記（4月13日）」『談話筆記：中』（憲政資料室大木喬任文書書類の部57-2）。

石橋重朝. 1900. 「石橋重朝殿談話筆記（9月17日）」

- 『談話筆記:上』(憲政資料室大木喬任文書書類の部 57-1).
- 磯部四郎. 1901.「磯部四郎殿譚話拜聴筆記」『談話筆記:下』(憲政資料室大木喬任文書書類の部 57-3).
- 板垣退助. 1919.『神と人道』忠誠堂. 8+12+140+29pp.
- 稲 雄次. 2001.『佐藤信淵の虚像と実像』岩田書院. 3+279pp.
- 大木遠吉. 1915.『男児の意気』実業之世界社. 2+3+496pp.
- 大木喬任. 年不明a.「奨言篇」憲政資料室大木喬任文書書類の部47-20.
- 大木喬任. 年不明b.『大木喬任伯意見雑記』憲政資料室大木喬任文書書類の部57.
- 大隈重信. 1922.『早稲田清話』冬夏社. 520+25pp.
- 大隈重信. 1885.『大隈伯昔日譚』立憲改進黨党報局. 18+707pp.
- 大隈重信. 1900.「大隈伯爵談話」『紀念』(大木遠吉による父喬任の追悼誌, 早稲田大学戸山図書館等に収められている)所収. 1-25pp.
- 大隈重信. 1922.『早稲田清話』冬夏社. 520+25pp.
- 大園隆二郎. 2005.『大隈重信』西日本新聞社. 246pp.
- 川越重昌. 1997.『佐藤信淵と阿波』徳島市立図書館. 450pp.
- 蒲原源子. 1900a.「蒲原源子夫人談話(7月以前)」『談話筆記:上』(憲政資料室大木喬任文書書類の部 57-1).
- 蒲原源子. 1900b.「蒲原源子夫人談片筆記(10月17日)」『談話筆記:上』(憲政資料室大木喬任文書書類の部57-1).
- 楠田英世. 1900.「楠田英世殿話(4月26日)」『談話筆記:上』(憲政資料室大木喬任文書書類の部 57-1).
- 久米邦武(大隈重信監修, 中野礼四郎校補). 1920.『鍋島直正公伝:第3編』侯爵鍋島家編纂所. 12+600pp.
- 久米邦武. 1934.『久米博士九十年回顧録:上巻』早稲田大学出版部. 21+4+4+21+692pp.
- 久米美術館. 2000.『久米邦武文書:巻2』吉川弘文館. 10+340+24+viii.
- 県社祐徳稲荷神社社務所. 1930.『祐徳文庫図書分類目録』県社祐徳稲荷神社社務所. 51+260+5pp.
- 佐賀県立図書館. 1982.『佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録:索引編』佐賀県史料刊行会. 286+補5pp.
- 佐賀県立図書館. 1985.『蓮池鍋島家文庫目録・倉永家資料目録』佐賀県立図書館. 339pp.
- 佐賀大学附属図書館. 1962.『小城鍋島文庫目録』佐賀大学附属図書館. 87pp.
- 重松 優. 2006.「大木喬任伝記資料『談話筆記』について」『ソシオサイエンス』12号. 249-256pp.
- 重松 優. 2007a.「大木喬任と天賦人權」『ソシオサイエンス』13号. 125-139pp.
- 重松 優. 2007b.「『大木喬任伯意見雑記』をめぐって」『社会学論集』10号. 395-398pp.
- 鳥 善高. 2006.「幕末に甦る律令 枝吉神陽伝」『枝吉神陽先生遺稿』(龍造寺八幡宮楠神社編, 出門堂)所収. 271-317pp.
- 島内嘉一. 2002.『年譜考大木喬任』アピアランス工房. 574pp.
- 白川武人他. 1991.『佐賀県立佐賀西高等学校収蔵国書分類目録』佐賀県立図書館所蔵. 53pp.
- 相馬由也. 1936.『中野方蔵先生』中野邦一. 2+4+4+3+4+4+172+31+5pp.
- 副島種臣. 1900.「正二位勲一等伯爵大木君墓碑・副嶋伯爵談話」『紀念』(前掲大木喬任追悼誌)所収. 1-25pp.
- 高木秀臣. 1900.「高木秀臣殿譚話(2月20日付)」『談話筆記:上』(憲政資料室大木喬任文書書類の部 57-1).
- 高野和人. 1994.『肥前鍋島家分限帳』青潮社. 2+94+94pp.
- 武雄市教育委員会. 1983.『武雄鍋島家歴史資料目録:後編』武雄市教育委員会. 190pp.
- 鶴久次郎. 1978.「大木家系図」『筑後豪族旧家系図』所収. 鶴久次郎. 132pp. (本資料は佐賀県立図書館鍋島文庫収蔵の大木氏系図を写したものの)
- 鴫田恵吉. 1941.『佐藤信淵』大観堂. 414pp.
- 徳富蘇峰. 1922.「大隈侯」『世界の大偉人大隈侯記念写真帖』(昇山堂出版部)所収.
- 中川 元. 1901.「中川元殿談話筆記(5月8日)」『談話筆記:中』(憲政資料室大木喬任文書書類の部 57-2).
- 長森敬斐. 1900.「長森敬斐殿談話筆記(7月26日)」『談話筆記:上』(憲政資料室大木喬任文書書類の部 57-1).
- 檜林忠男. 1970.「弘道館---佐賀藩」『日本の藩校』

- (奈良本辰也編, 淡交社) 所収. 241-264pp.
- 楠公義祭同盟結成百五十年記念顕彰碑建立期成会.  
2003. 『楠公義祭同盟』楠公義祭同盟結成百五十年  
記念顕彰碑建立期成会. 250pp.
- 浜尾 新. 1900. 「浜尾新殿談片」『談話筆記: 上』(憲  
政資料室大木喬任文書書類の部57-1).
- 『法令全書』内閣官報局.
- 水尾訓和. 1900. 「水尾訓和殿談話筆記」『談話筆記:  
上』(憲政資料室大木喬任文書書類の部57-1).
- 森 銑三. 1942. 『佐藤信淵 疑惑の人物』今日の問  
題社. 5+4+299pp.
- 森 銑三. 1948. 「信淵と松陰」『国民の歴史』1948  
年4月号 (『森銑三著作集: 続編第2巻』所収).
- 柳川市史編集委員会. 2006. 『柳川市史: 史料編3』  
柳川市. 602pp.
- 山口県教育会編. 1974. 『吉田松陰全集: 第9巻』大  
和書房. 608pp.
- 渡辺幾治郎. 1958. 『日本宰相列伝・大隈重信』時事  
通信社. 250pp.